ヨハンナ・シュピーリ『ハイディ』[1]
― 宗教的要素、保守的女子教育観、文学作品としての古典性 ―

桑　原　ヒサ子

はじめに

2004年度敬和学園大学オープン・カレッジ「知っているようで知らない世界のお話」で『アルプスの少女ハイジ』について話す機会を与えられた。現代のハイディ理解は、1974年にテレビ放送された『アルプスの少女ハイジ』[2]あるいは、その再放送やビデオ、劇場映画によると言ってよいだろう。実際、公開講座に参加した百数十名のほぼ全員がこのアニメを見ていた。その一方で原作を読んだことのある参加者は数えるほどしかいなかった。しかし、近年ドイツにおいても同様の傾向が見られる。日本のアニメ産業が世界市場に進出して久しいが、それを背景に某テレビ局で2004年４月に放送された、外国で人気の日本のアニメ・ランキングによると『アルプスの少女ハイジ』は第７位で、ドイツでは37回も再放送されているということだった。このアニメが無視できぬ存在となっていることは、『ハイディ』研究においてもテーマとして取り上げられていることからも分かる[3]。

2001年のヨハンナ・シュピーリJohanna Spyri(1829-1901)の死後100周年を記念して7月6日と7日の両日、チューリヒにおいてヨハンナ・シュピーリ財団とチューリヒ大学ドイツ文学科との共催で「ヨハンナ・シュピーリとその作品」と題した国際コロキウムが開催された。アニメ『アルプスの少女ハイジ』の演出家、高畑勲も講師として招かれ、テレビ番組の成立過程と原作の取り扱いについて語っている[4]。52話構成のテレビ・シリーズのために、原作の意図を崩さぬようオリジナルのエピソードが加えられた。その割合は40パーセントに上る。その一方で、原作からの変更として次の三点を挙げている。第一は羊飼いのペーターの人物描写である。原作ではハイディより年上だが、学習能力は劣っており感情も乏しい。それが、アニメでは活発で頭もよい少年となり、ハイディを導く友達として登場する。第二はロッテンマイヤー嬢である。アニメではクララに付き添ってアルムにやって来る。そして彼女がアルムで困る姿が喜劇的に描かれている。子供の視聴者がフランクフルトでは恐ろしい存在でしかなかったこの養育係を笑い飛ばして、この役柄に救いを与えようとの意図である。そして最後の変更点として挙げられているのは、原作におけるキリスト教信仰にかかわる要素を大幅に削除したことである。宗教的色調やキリスト教的メッセージは日本人には馴染みがないというのが理由である。これにより、クララの祖母の描かれ方が大きく変わる。フランクフルトで苦しむハイディをクララの祖母はもちろん

慰める役を果たすが、もはや読むことや祈ることをハイディに教える存在ではなくなる。

この第三の変更点は原作とアニメの決定的相違となっている。したがって、公開講座「知っているようで知らないお話」という統一テーマに沿うように、日本では知られていない原作の宗教的側面について話すことにした。しかし、時間的制約のために充分解説できたとは言い難い。この論稿では、まず第一に原作におけるキリスト教的要素について詳細に分析してみたい。高畑は、キリスト教的要素の除去による大きな変更としてクララの祖母の描き方を挙げていたが、実際には一人の人物の描き方に留まらず、原作を根底から覆すほどの変更を加えることになった。

もちろん、宗教的要素と言うときに二つのレベルを区別して考えなくてはならない。一つは、文学作品を構成するテーマ、構造、描写、筋、人物描写などに宗教的要素が巧みに組み込まれ、最終的には作品の美的価値を高めることに寄与する場合である。こうした例は世界文学の中にいくらでも探し出すことができる。もう一つは、高畑もシュピーリの作品に感じていたように、礼拝や讃美歌など信仰を強調する宗教的要素の使用である。後者は容易にいわゆる説教臭さの印象を与えることになる。『ハイディ』にも後者の影響は明らかに見られる。しかし、原作を支える前者の美的価値と関わる緻密な構成力をここでは主に検証したい。文学作品とアニメにおける表現方法の相違を考えれば仕方のないことだが、後者は前者の優れた表現方法の大部分を犠牲にしたことが明らかとなるだろう。

第二にシュピーリの女子教育観について考えてみたい。アニメにも原作同様アルプスという自然の中にあって、祖父に導かれながらルソー的体験学習を積んでいくハイディがいる。しかし、フランクルフトでハイディが体験することはこれとは対立した教育である。ここには宗教教育と結びついた当時の女子教育の姿を見て取ることができる。このテーマについては、作品全体にみられるアルプスとフランクフルトの対立構造の中で考察してみたい。

第三に、原作とアニメに共通する感動の源、ハイディに注目してみたい。すでに見たように、アニメ全体の40％は創作であること、原作の重要な構成要素である宗教的因子をアニメが放棄していることを考え合わせると、それぞれは全く別個の作品と言わざるをえない。しかし、原作におけるハイディが担う多義性はアニメにおいて減少してはいるが、ハイディはやはり「ハイディ」である。この主人公が原作においてもアニメにおいても不変の感動を与え続けている。時代や地域を超え普遍的概念となった「ハイディ」とは何なのか、今一度振り返って、まとめに代えたい。

Ⅰ シュピーリとその作品

作品があまりに有名になりすぎて作者ヨハンナ・シュピーリの名は今や、彼女が創造したハイディの名の影に霞んでしまったかに見える。簡単に作者シュピーリについて紹介し

てみよう[5]。

ヨハンナはチューリヒ湖の南に位置する小村ヒルツェルに1827年医師ヨハン・ホイサーの娘として生まれた。6人兄弟姉妹で、兄二人の次女であった。父は他所から無医村のヒルツェルに移って開業した。住居に隣接する診療所では外科的処置が行われ、精神病患者を入院させていた。こうした父の仕事を子供時代に目の当たりにした体験は、ハイディの夢遊病を始め、精神を病む数多くの子供の主人公たちのリアルな描写につながっている[6]。母メータはヒルツェルの牧師の娘で、数多くの宗教詩を書いている。匿名で出版された詩集『隠れた女の歌』は当時ドイツ語圏では遍く知られていた。こうしてヨハンナは敬虔なプロテスタントの家庭で成長する。

1852年、当時の結婚年齢としては遅い25歳で、長兄の友人である6歳年上のチューリヒの弁護士ベルンハルト・シュピーリと結婚、チューリヒに移り住む。夫は市の官房長にまで登り詰めた人だったが、多忙で食事中にも新聞を読み、新妻とは話をする時間もなかったらしい。結婚当初に鬱病状態にあったことは、C. F. マイヤーの妹でヨハンナの友人ベッツィ・マイヤーに宛てた手紙から知ることができる。原因は、ホームシック、チューリヒの狭い住居、核家族、都会での社交であった。ちなみにシュピーリ家には夫の友人であるR. ヴァーグナーも訪れている。1856年[7]までベッツィとC. F. マイヤーの母、マイヤー夫人が主宰する文学グループ「月曜会」がヨハンナにとって唯一居心地の良い場所であった。ヒルツェルでの生活の最後の数年間、ヨハンナは母の厳しい敬虔主義的世界像から解放され、さまざまな詩人の作品に触れ独自の自由な世界像を作り出そうと試みていた。しかし、こうしたヨハンナの苦悩に対して、厳格な敬虔主義者であったマイヤー夫人はヨハンナに欠けている敬虔さに気づかせようとする[8]。その後ヨハンナは信仰深い生活へ戻るよう努め始める。

1855年に一人息子のベルンハルト・ディートヘルムが誕生するが、病弱な息子は1884年に亡くなり、同年息子を追うように夫も他界する。以後ヨハンナは17年間「官房長夫人」として寡婦として過ごしている。

ヨハンナは44歳の時、ブレーメンの改革派教会牧師フィートアの勧めで宗教作家として文筆活動を始める。1871年の処女作『フローニの墓の上の一枚の葉』の作者名には、当時の女性作家の場合にはよくあったように「J. S.」のイニシャルだけが記載されていた。この作品がブレーメンで出版されたことから北ドイツで人気が出、立て続けに大人向けの物語が成立する。そこでも作者名は「『フローニの墓の上の一枚の葉』の作者による」とだけ表記された。その内容は、幸福になるために必要なのは、正しい信仰、神への回帰、そして神の救いの力を信じるというものだった。

1878年から子供向けに書き始め、亡くなるまでに49の物語28巻を出版し、その内の16巻が『子供たちと子供を愛する人々のための物語』に収められている。その頂点に位

置するのが『ハイディ』第1巻、第2巻である。第1巻『ハイディの修業時代と遍歴時代』は1880年に出版されるやベストセラーとなり、年内にさらに第二版5000部を印刷している。そしてこの第二版から作者名はフルネームで掲載されるようになる。翌年には第三版、そして続編の第2巻『ハイディは習ったことを使うことができる』も出版された。以後、毎年のように5000部づつ重版され続ける。

児童文学書はほぼすべて、ブレーメンから移ってゴータのF. A. ペルテス出版から刊行されている。つまりシュピーリの作品はスイスではなく、ドイツで出版されたのである。この背景には、ドイツがスイスとは比較にならぬほど大きな書籍市場を持っていたこと、スイス人にとっては何の変哲もないアルプスという作品の舞台がドイツ人にとってエキゾチズムを生み出したことがある。ドイツの出版界もシュピーリからスイス特有の物語を期待したし[9]、シュピーリもまたそれに応えようとしたと考えられる。冒頭にとりわけドイツで日本製アニメが好まれていることを紹介したが、この事実と重ね合わせると、ドイツあるいはドイツ文学におけるパラダイスとしてのスイスというトポスは興味深いテーマになりうる。G. ヘルレはこの伝統はグリンメルスハウゼンの『ジンプリツィシムスの冒険』(1669年)まで遡ると指摘してる[10]。ドイツのスイスに対する精神史的・文化史的イメージの変遷は興味深いテーマではあるが、ここではそれを指摘するにとどめたい。

1882年には『ハイディ』のフランス語訳が、英語訳は1884年にアメリカで出版され、それぞれ大ベストセラーとなっている。『ハイディ』は児童文学ではあったが、子供以外の読者を多数獲得したためシュピーリはスイスの国民的作家の地位を得、スイス初の女性作家と見なされる。しかし少し意地悪な見方をすれば、それは外圧によるものだったかもしれない。1901年にシュピーリの死亡記事が「新チューリヒ新聞」に掲載されて初めてチューリヒの子供たちは、市の官房長夫人と『ハイディ』の作者が同一人物であることを知ったのであり[11]、スイスで『ハイディ』が出版されるのは、作者の死後随分経った1918/19年のことである。

II 救済物語としての宗教的作品構造

『ハイディ』は今日では50の言語に翻訳され数百万部が売られており、今日に至るまで児童文学の古典に数えられている。しかしこの作品がなければ、児童文学の人気作家であったシュピーリも彼女の同時代の数多くの児童・少女文学の作家たち、例えば当時好んで読まれた子供向け雑誌に作品が載ったパオリーネ・シャンツやテクラ・グンペルトなど[12]今では一部の研究者しか知らない作家同様、忘れ去られてしまった可能性は高い。

19世紀の少女文学の作家たちは、高尚な文学作品の作家というより教育者を自認していた。シュピーリも例外ではなかった。ある自作に対して読後感を寄せてくれたC. F. マイヤーへの返信の中で次のように答えている。「おそらくあなたのおっしゃる通り、私の

暦物語はとても簡素なものです。こういうものを書くことはあなたには決しておできにならないと思います。表現の豊かさと力が溢れるあまり直ちにその枠組みを壊してしまわれることでしょう。この分野が私には合っているのです。そして、周りの民衆の中に、悪い言葉を追い払えるような言葉を広めることができるという感覚が、私に満足を与えてくれるのです。」[13]ダグマル・グレンツによれば、シュピーリにも大きな影響を与えたと考えられる19世紀前半の少女文学全体に共通した特色は、あらゆる苦難を神から与えられた試練とみなす、強いキリスト教的・宗教的傾向および、明確な保守的社会観であった。「女性教育においてとりわけ宗教が特別の意味を持つのは『性にもとづく特性』という対極的に捉えられたパラダイムのなかで、深い宗教的心情が女性の本性の特別なしるしとされたからである。」[14]

シュピーリの作品もこの傾向に沿ったものだった。例えば物語の中に祈りや賛美歌を挿入したり、苦難にあっては神に向かうべきことを繰り返し要請して物語そのものが崩れることが少なくなかった。両親の病気あるいは死亡による貧困からの解放という当時の児童文学が好んだテーマもシュピーリの得意とするテーマであった。その際、シュピーリの作品は同情や隣人愛に訴える一方で、忍耐強さによって貧困が克服されると、最終的にはその克服は神の恩寵に他ならないことを強調した。当時の少女文学に見られたこのような道徳的・宗教的教育の内容は、宗教的表象世界の世俗化がすでに進んでいたことや、1880年ごろにはドイツ語圏でも数々の女性団体が教育、職業、政治における女性の平等を目指して運動し始めていたことを考えれば、早晩その存在意義を失うことは明らかだった。

その中で『ハイディ』が忘却を免れたのは、宗教的要素が作品中に張り巡らされているにもかかわらず、それが他の作品に見られるような感傷主義や宗教の押しつけに繋がらず、むしろ文学作品としての価値を高める効果を持ったからである。ここでは特にアルプスの風景描写と作品構造の多層性を中心に考えてみたい。

1. 楽園としてのアルプス

> 谷間はずっと下の方で、朝日を一杯浴びて輝いていた。日の前には大きな広々とした雪原が、真っ青な空に向かって高く盛り上がり、そして、その左側には、途方もなく大きな岩の塊がそそり立ち、その岩の至る所から、のこぎりの歯のような裸の高い岩柱が青い空に突き出して、高い所から厳かにハイディを見下ろしていた。その子は黙って座ったまま周りを見渡してみると、 あたり一面に深い大きな静けさがどこまでも広がっていた。優しい青いツリガネソウや黄金色に輝くシストの花をかすめてそっと静かに風が流れているだけだった。すると、花たちは、あちらでもこちらでも、細い茎の上であちらへ、こちらへと頭を頷かせるのだった。ペーターは気を張りつめて疲れたのか、いつの間にか寝込んでいたし、ヤギたちはヤギたちで上にある藪あたりを登っていた。ハイディは、これまで体験したことがないほど、いい気持ちになっていた。金色の日光を、

清々しい微風を、柔らかい花の香りを深く吸い込みながら、いつまでもこうしていたいと考えてばかりいた。こんなふうにして、かなりの時間が過ぎた。ハイディがあまりたびたび、あまり長い間あちらの高い山々を見上げていたので、その一つ一つには顔があって、仲の良い友達みたいに自分の方を親しげに見下ろしているような感じがした。(15)

1歳で両親を亡くしたハイディは母方の祖母と叔母デーテに育てられたが、祖母も亡くなり、住み込みの仕事に就くことになったデーテは村の人々から変わり者と呼ばれ、村から離れて一人アルムに住む祖父に5歳になったハイディを預ける。その翌日、ヤギ飼いのペーターと牧場に登りハイディが初めて目にするアルプスの光景である。この風景描写に、閉塞的で見通しのきかない近代都市フランクフルトと対立する自然賛美を読みとることは容易であろう。しかし、シュピーリのアルプスにはもう一つの世界が書き込まれている。

ここに描写されている雄大な風景を眼前にして、誰もが感動と畏敬の思いを受け、全き存在としての自己そして創造主（「だれがこのように素晴らしい自然を作り出したのだろうか」）について考えるだろう。宗教とは呼ばれていないが、一種の宗教的体験がここにはある。「自分の方を親しげに見下ろしている」顔は誰なのだろうか。ここでははっきりとキリスト教の神が言われているわけではない。むしろキリスト教によっても教会の世俗化によっても鎮められない太古の神のイメージが感じられるだろう。

H. キーペはシュピーリの風景描写に使用される動詞、特に分離動詞の前つづりに着目しながら、自然の動きを詳細に分析している(16)。風景描写に頻出し、風景の輪郭をぼやけさせる光や香りの現象、それに風の音は、その放射力によって本来の意味を獲得していると述べている。そられの現象は要するに現実として体験されるだけでなく、豊かな情緒を内蔵する複数の倍音を共鳴させ、風景全体に「抗しがたい力」を与えていると言うのである。

この風景描写に先立って、祖父を訪ねてアルプスの山道を登る途中で、重ね着を強いられていたハイディが次々に服を脱いで下着姿でヤギを追いかける箇所がある。6月の太陽に照らされて、煩わしい服を脱ぎ捨て最終的にはその子の真の姿が現れる。この一見子供らしい行為には、「ありのまま/裸のまま」という自然の表象記号が重ねられている。それを見たデーテは「無分別な vernunftlos ハイディ」、「理解力っていうものがないの」と叱りつける。このことによって、理性以前の自然児の出現がさらに強調される。衣服を脱ぐ行為は、自然への回帰の重要なトポスとなっているわけだが、アルプスにあってはハイディが裸でいることに全く羞恥心を感じないという点において、場所としてのアルプスは単なる自然賛美を超えて、ルソーの思想の根本にある聖書的「楽園」であると言えるだろう。こうして冒頭においてハイディは、自然（素直）、無罪、無垢の存在として楽園の住人たることを保証される。

次の引用では、ハイディ自身が「木の葉」となって自然と一体となる様が強調され、自然現象に姿を変えた神に愛され交信する様子が繰り返し描かれる。

> ハイディは今度は風の音に耳を傾けないではいられなかった。風は上の岩から低い不思議な音を立てながら、だんだん近くにそしてだんだん激しく吹き下ろしてきて、とうとう樅の木にぶつかって、枝々を揺さぶり動かした。それは、まるで風が嬉しくて歓声をあげているみたいだったので、ハイディも思わず喜びの声を挙げて、あちらこちら木の葉のように吹き回された。(17)

先のキーペはさらに「見下ろす niederschauen/ herniederschauen/ herunterblicken」、「吹き下ろす heruntersausen」、「(光を) 投げかける herunterleuchten」という天から下方向への動きと、「見上げる aufschauen/ hinaufschauen」、「呼びかける hinaufrufen」など地上から上方向の動きが組み合わされて垂直の神秘的なダイナミズムが作り出されていることを指摘している。次の引用にはそれが明瞭に見て取れるだろう。

> こうして夕方になり、ハイディがまた山に登っていくと、頭上に星が次々と姿を現して、きらきら輝きハイディに光を投げかけた。どの星もハイディの心の中へ、それぞれ新たに大きな喜びを射し込もうとでもしているみたいだった。それで、ハイディは一瞬一瞬立ち止まっては、空を見上げないではいられなかった。すると満天の星がいよいよ明るく嬉しそうに光りながら、こちらを見下ろしていたので、つい大声で呼びかけずにはいられなかった。「ええ、もう分かっているわ、神様がどんなことにも救いをもたらすことができるって、よく分かっておいでになるから、人間はこんなに楽しい気持ちですっかり安心していられるんだって！」星は一斉に、ちらちら光ったり輝いたりして、ハイディが上の山小屋に着くまで、ハイディの後を目で追って合図を送ってきた。おじいさんは表に立っていて、やはり星を眺めていた。こんなにきれいな星空は久しぶりのことだったからだ。(18)

ここには天と地との交信が明瞭に読みとれる。ハイディは相手の存在を意識して言葉を使用して反応している。第一の引用の「金色の日光を、清々しい微風を、柔らかい花の香りを深く吸い込みながら」やこの箇所の「どの星もハイディの心の中へ、それぞれ新たな大きな喜びを射し込もうとしているみたいだった」で伝えられる融合あるいは合体には、はっきりそうとは書かれていないが、神との神秘的合一を読みとることができよう。

こうしてアルプスの世界は都会から見た自然の楽園であるばかりでなく、聖書に描かれた本来の意味での「楽園」として理解することができる。

2.「放蕩息子」の比喩

次に作品構造に注目してみよう。この作品では「アルムおんじ」と呼ばれている、ハイディの祖父の回心物語が作品の筋を構成している。

若い時分に遊びで親の財産を使い果たし、流れて入隊し、そこで殺人を犯したらしいという祖父の暗い過去が作品の冒頭にデーテから好奇心の強いバルベルに語られる。第三者によって語られるだけで、真実がどうなのかは実は最後まで分からない。しかし、この祖父の過去の行状のためにアルムのふもとの村人から忌み嫌われ、祖父の方でも村人とのつき合いを断ち、教会へ通うこともせず、ただ一人村から離れたアルムで暮らしていることは事実である。この情報は当面は、これからハイディが一緒に暮らさなければならない祖父の暗い過去やその偏屈さを強調することで、ハイディの波乱に満ちた前途を想像させ、読者を緊張させることができればその役目は充分果たしたことになる。実際、読者はハイディに自己同一化し、小屋でのロビンソン的生活、アルプスでの自然体験、ヤギの世話やペーターとの友情に心を奪われていくため、一旦祖父の問題は本筋から姿を消すことになる。

再びテーマとして浮上するのは、フランクフルトでクララの祖母がハイディにおみやげの絵本を与える所からである。アルムを思わせる絵を見てハイディは惹きつけられるが、その絵本は第一にはハイディが字を読めるようになる切っ掛けとなる。読みたいという動機によってハイディは見る間に字を覚えてゆく。それと同時に悩みを持つハイディに祈りを教えたのもこの祖母である。ハイディが本を読めるようになった時、幾枚かの挿絵の簡単な説明がされ、読者はそれが新約聖書ルカによる福音書第15章11-32節の有名な「放蕩息子」の話であることを知る。イエスはこの話を含めていくつかのたとえ話をしながら、罪ある者でも悔い改めれば神の限りない恩寵によって救われると諭した。帰郷を願って祈っていたハイディだが、それがなかなか叶えられず彼女は神への祈りを怠ってしまう。クララの祖母に諭されてハイディは再び祈り始めるが、この一時的な神からの離反は「罪」と呼べるものではない。むしろここでは本筋でこれから起こることをそれとなく提示する語りの技法として注目すべきであろう。

アルムに戻ったハイディは祖父にも一緒に祈ることをせがむ。祖父の躊躇する姿を見て、ハイディは大好きな絵本の全文を祖父に読んで聞かせる。『ハイディ』第１巻のクライマックスである。

ハイディがアルムにやってきた時の祖父の最初の問い「ここで何の用事だ」は、行く場所のない年端のいかなぬ孤児に対して過酷な発言である。ハイディはこの問いを転義としてではなく、本来の意味に理解して「小屋の中に何があるのか見せて」と応じて、祖父の気勢を無意識に制する。しかし、その本来の答えはこの小説を最後まで読んで初めて分かることになる。「おじいさんを神様と村の人たちと仲直りさせるために来ました。」

3. 旧約聖書とのつながり

デーテがバルベルに語るハイディの祖父の過去は、祖父の回心物語の枠構造を構成する上で重要な位置を占める。しかし、それにしても量的にも長く説明が念入りで注意を引かれる。この部分を丁寧に見ると、「アルムおんじ」と呼ばれる祖父がその孫ハイディを通して、新約聖書の比喩のごとく回心するという私的物語を超えた別のレベルの物語が重なって見えてくる。

祖父の罪は「放蕩息子」のそれよりずっと重い。賭事と酒で家の財産を全て失ってしまっただけでなく、それが原因で亡くなった両親の死にも責任がある。彼はモーセの第五戒「あなたの父母を敬え」に違反している。その上、彼とは正反対の「大人しくてきちんとした性格の」弟を家から追い出し、おそらくは死へ追いやったと想像される。直接手を下したのではないとしても、人類史初の殺人者で弟殺しのカインの印が浮かび上がってくる。彼はカインと同様放浪した末、外国の軍隊に入るが、そこで喧嘩が原因で殺人を犯す。その後、ビュンデン州出の女性との間に息子が生まれるが、この女性との関係も正式の結婚とは思えない。その女性も間もなく亡くなっている。こうして彼は、第六戒「殺してはならない」、第七戒「姦淫してはならない」に違反することになる。

この罪人を罰するために下された神の裁きは、無実の者の命を奪うことだった。祖父の息子は仕事中の事故で亡くなり、その妻も夫の死を苦にして病死する。これによって三世代目のハイディが直面する生存の危機も祖父の罪に起因し、祖父に代わって彼女が被ることになる。しかしその子には問題解決となる重要な役割が与えられている。

ハイディが孤児なのは、シュピリの時代の児童文学において片親のいない子供や孤児を主人公とする流行があったからだ。しかし片親の子や親のない子は「特別な子」だった。モーセやイエスを思い出してみれば分かることだが、「特別な子」には、犠牲行為あるいは犠牲的死のモチーフをしばしば伴う特別な救済と解放の課題が課せられる。アルプスの風景描写で見たように、ハイディは神から愛される「神の子」として描写されている。彼女は今や祖父を救済するために天から遣わされたと考えることができる。「神様がおまえをアルムにおよこしになったのも、私のためを思ってくださってのことなんだな。」(19)こうして、新約聖書の比喩の物語の背後に旧約聖書に発するさらにスケールの大きな救済物語が浮かび上がってくるのである。

第2巻では、ハイディは専ら治癒者として活躍する。娘を失って落胆するクラッセン医師を慰め、実際の治癒はできないまでも讃美歌の朗読でペーターの盲目の祖母の心に光を取り戻させ、そしてクララの歩行を可能にさせる。こうしたハイディの行為がイエスの奇跡物語を下敷きにしていることは容易に察せられる。しかし、ハイディは治癒者であると同時に突然、宣教師にもなったようである。人助けごとにハイディが説くのは、神への祈

りの大切さや讃美歌[20]の癒しの力の素晴らしさだ。第2巻には、クララがアルプスの生活を追体験することや彼女が歩けるようになるという感動的結末が待っているものの、宗教教育的側面が露出している。

一方作品構造も第1巻と第2巻ではかなり異なる。第1巻が時間を拡張あるいは縮約する物語り技法や登場人物による語りの中に前史を組み入れるなど効果的な組合せによって筋を展開している一方で、第2巻はその点においても明らかに硬直的な印象を与える。第2巻の作品の完成度は、遠く第1巻には及ばない。

Ⅲ アルムとフランクルト、和解の物語とシュピーリの女子教育観

回心・救済物語がアルムを舞台に展開する一方で、フランクフルトではもう一つのテーマであるシュピーリの女子教育について窺い知ることができる。

アルムとフランクフルトは対立概念として理解できる。田舎と都市、自然と文明、貧困と富、治癒力と病。フランクフルトでハイディは危機的状況に陥る。そこから、善なるアルム、悪のフランクフルトと烙印を押すのは簡単である[21]。しかし、ことはそう簡単ではない。アルムにやって来るフランクルトの人々は精神的にも肉体的にも病から癒え、逆にアルムの人々には、何不自由ないハイディの将来も含めて、都会から物質的富がもたらされる。両者は対立しているのではなく、相互に必要としているかのようだ。

19世紀後半の鉄道網の爆発的拡大は －ハイディもまた鉄道によってスイスとフランクルトを移動する－ スイス観光の幕開けとなり、アルプス熱の高まりによってスイス観光は大衆化されていく。アルプスは健康を害した人の療養場であり、平凡な旅行に飽きたらぬ冒険家にはアルプス登山の黄金時代が訪れる。シュピーリは激動する時代を切り取って、『ハイディ』の最終場面において現実にはありえないような自然と文明の理想的和解を描いている。

第2巻のタイトルは『ハイディは習ったことを役立てることができる』である。ここで言うハイディが学習した場所とは、アルムではなくフランクフルトを指している。ハイディが「習ったことを役立てる」という点で八面六臂の活躍を見せるのは確かに第２巻だが、すでに第１巻においても祖父を神と人々と和解させ、ペーターの祖母にも讃美歌を朗読して幸福を与えている。ハイディが人々を助けるようになるのは、すなわちフランクフルトから戻ってからだ。フランクフルトはアルプスという自然世界から引き離されたハイディにとって、巨大で見通しが利かぬ迷宮として立ちふさがり、彼女を精神的・肉体的危機に陥れる。それでも人助けに有益な学習ができたのは大都市だったのである。都市社会は、アルプスへの憧れ、すなわち自然賛美と表裏の関係にある文明批判という図式に明らかに依拠して、農村社会と比して病的な姿を －例えば障害を持つクララがその象徴となっている－ 呈している。しかし大都市は道徳的・文化的頽廃の場所として批判されているわ

けではないのである。

大都市フランクフルトでハイディが学習したことを見ると、シュピーリの女子教育観がはっきりする。ハイディがゼーゼマン家の祖母から教えられたのは、神への祈り、字を読むこと、それに裁縫である。識字力は作品の中では専ら聖書物語を読み、讃美歌を朗読するために必須であることを考えれば、神への祈り同様、信仰を持つことと結びついている。19世紀前半の女子教育に不可欠であった宗教教育の影響を19世紀後半の少女文学が大きく受けていたことは「Ⅰ シュピーリとその作品」で触れた。19世紀前半には宗教と女性の本性を結びつけるのは愛であるという社会的通念があった。キリストの福音としての愛を学ぶことで、家庭における女性の愛する能力を高めることが要請されたのである。ハイディの敬虔さは第1巻においてはまだ巧みな作品構造の中にうまく組み込まれていた。しかし第2巻『ハイディは習ったことを役立てることができる』においては、シュピーリは突然ハイディの口を通してことあるごとに、人間世界が神の摂理によって動かされていることを強調して、小さな読者に宗教の大切さを教えようと試みる。こうした敬虔主義的なシュピーリのメッセージは、しかし19世紀末においてはすでに時代遅れになりつつあった。

女子教育のもう一方の柱は、裁縫が象徴する女性の仕事である。ハイディを学校へ通わせるのを拒んでいた祖父は、フランクフルトから戻ったハイディが女性の仕事を積極的に引き受け、家を整理整頓し清潔にしようと配慮する姿を見て、「ハイディがよそに行ったのも無駄ではなかったわい」[22] と満足な様子である。フランクフルトでハイディはそもそも掃除の仕方は習っていない。セーゼマン家では召使いたちが家政に関わる仕事をすべてこなしていたからだ。しかし、ハイディはそこで市民階級の女性の役割、すなわち他者、それもとりわけ男性のためにくつろぎの場を作り出す責任のあることを認識し、居心地のよい家庭を維持するという女性の役割を学んだと推測できる。作者の分身であり人格者のゼーゼマン夫人ではあるが、19世紀末にはすでに存在した女性運動の歴史認識に照らしてみると、この女子教育観は保守的・後進的と言わざるをえない。

『ハイディ』は宗教色の濃い作品と言われるが、すでに見てきたようにその要素は明らかに二つのレベルに分かれれている。回心・救済物語を軸とする第１巻では、聖書の素材が作品構造や筋の展開、風景描写に巧みに取り込まれていた。こうした構成は相互に作用して文学作品としてのこの作品の価値を生み出していた。だが、フランクフルトでハイディが受ける女子教育やそれを専ら役立てようとする第２巻は、道徳的・宗教的教育書の性格を帯び、信仰の勧めそのものがメッセージとなってしまっている。このことをここでもう一度確認しておきたい。

Ⅳ 形象としての「ハイディ」

『ハイディの修業時代と遍歴時代』という第1巻のタイトルは、ゲーテの長編小説『ヴィル

ヘルム・マイスター』（『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』1795/96年、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』1829年）を想起させる。ゲーテのこの作品はその後教養小説の典範となり、『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』、『晩夏』、『ハイディ』第1巻と同年に出版されたスイスの作家ケラーの『緑のハインリヒ』、20世紀に入ると『魔の山』、『ガラス玉演戯』など後代の教養小説に多大な影響を与えた。主要な作品の他にも19世紀後半には、『ヴィルヘルム・マイスター』の亜流的作品がいくつも成立している。ドロステ=ヒュルスホフと並んでゲーテを愛読していたシュピーリもこうした流行の中で教養小説に挑戦しようとしたことは大いに考えられる。

この点に関する現代の『ハイディ』研究は、教養小説の主人公が男性に独占されているのに対して、初めて女性を主人公にしたことを評価する一方で、ジャンルとして教養小説に分類できるかという点では否定的な態度を示している。ハイディの成長が5歳からせいぜい9歳（第２巻は9歳から10歳を過ぎる年齢と重なる）の短期間であること、また身につけたことといえば祈ること、読むこと、縫うことくらいであることが根拠となっている。

しかし、主人公の数年間の体験しか描いていなかったとしても、おそらくシュピーリはハイディの重要な「修業」と「遍歴」を描いたと自負していただろう。ハイディの名が含意するのは「異教徒、非キリスト教徒」である。フランクルトに到着した時、ロッテンマイヤー嬢がハイディの名を初めて聞いた時、「そんなの、ちゃんとした（＝キリスト教徒の）名前であるはずないわ。それじゃ、まだ洗礼を受けていないのね。」[23] という反応とも符合する。フランクフルトでの厳しい「修業」の末、ハイディは信仰を得、大人たちでさえ手本とする立派なキリスト教徒になる。そして女性としても恥ずかしくない能力を身につける。ハイディは大したことをやり遂げたのである。そうシュピーリは考えただろう。教養小説に付物の人生行路の比喩である旅、すなわちアルム－フランクフルト－アルムの「遍歴」もハイディは経験する。家を出、修業の末、立派に成長して帰郷する。

しかし、ハイディの性格は始めから終わりまで変わらない。このことが『ハイディ』をジャンルとして教養小説に分類することを困難にしている。しかしこのハイディの不変性こそが、原作にもアニメにも共通する感動の源だと私は考える。ハイディは自然児として無罪・無垢の存在であった。ハイディという存在はしたがって、ヨーロッパの精神史が求め続けた人間の幸福状態、すなわち楽園追放以前の人間の理想状態を体現している。大人の読者からすると、このハイディの姿は自らの「理念的ルーツ」なのである。人生を生きることは誰にとってもある意味で「修業」と「遍歴」の積み重ねである。その「遍歴」の中で失ってしまったものを人はハイディの中に再発見する。すなわち、ハイディは理想の子供というよりは、自分もまたかつてそうであったが、今はもう決して戻ることのできない子供の原像なのである。この作品が大人の読者をも惹きつけて放さない理由はここにある。第1巻のタイトルとは逆説的に、小さな主人公が人間の「遍歴」以前の姿で永遠となった

ことが、『ガリヴァー旅行記』や『ロビンソン・クルーソー』と並ぶ児童文学の古典的作品としての『ハイディ』の地位を保証しているのである。

註

(1) ドイツ語の発音に従うと「ハイディ」となる。「ハイジ」となったのは、1920年(岩波書店からは1934年)の野上弥生子による本邦初訳が『ハイヂ』だったからであろう。野上はドイツ語からではなく、英語訳から重訳している。1950年にドイツ語版からの翻訳を竹山道雄が出しているが、「ハイディ」に直さず先人に従ったのは、すでに「ハイジ」の名が定着していたからであろう。

(2) 1974年1月6日から放送開始、同年12月29日(全52話)に終了。演出：高畑勲、場面設定・構成：宮崎駿、キャラクターデザイン：小田部洋一。

(3) Thiele, Jens: Dehnung der Handlung durch sentimentale Füllelemente: "Heidi". In: *Trickfilm-Serien im Fernsehen: eine Untersuchung zur Didaktik der Ästhetischen Erziehung.* Oldenburg: Isensee 1981, S.32-35; Takahata, Isao: Making of the TV Series "Heidi, the Girl of the Alps". In: *Johanna Spyri und ihr Werk —Lesarten.* Zürich: Chronos 2004, S.189-204. このほか、日本におけるマンガ『アルプスの少女ハイジ』についてはDomenig, Aya: "Cute Heidi". Zur Rezeption von Heidi in Japan. In: Halter, Ernst (Hg.): *Heidi. Karrieren einer Figur.* Zürich: Offizin 2001. S.149-166.

(4) Takahata (3).

(5) 簡略なシュピーリの半生については、siehe Winkler, Jürg: Johanna Spyri. Vom Bergkind zur Erfolgsautorin. In: Dollfus, Andreas/ Rothenhäusler, Paul (Hrsg.): *Helvetische Herausforderung. Eine Anthologie von 24 Schweizer Autoren.* Stäfa: Rothenhäusler Verlag 1998, S.22-26.

(6) Villain, Jean: Johannas früh erwachter Sinn fürs Medizinische oder Wie Clara Sesemann auf ihre eigenen Füsse zu stehen kommt und Heidi gelernt hat, wie man es brauchen kann. In: Halter (3), S.68ff.

(7) この年の9月にマイヤー夫人自殺。

(8) ヨハンナの敬虔主義に対する態度、結婚当時の鬱状態についてはマイヤー夫人やベッツィに宛てた以下の手紙を参照。Briefe von Johanna Spyri an Verwandte und Freundinnen, Nr.3 u. Nr.5. In: *Johanna Spyri und ihr Werk* (3), S.229ff.

(9) シュピーリ自身気に入っていた、ハンブルクとヘルゴラントを舞台にした児童文学の原稿が1878年紛失している。牧師フィートアは意図的な紛失について、またそれが好都合であったことについて記述を残している。これにより、ブレーメンの友人たちとの関係は冷え切ることになり、出版社を変更することにもつながった。不快な出来事ではあったが、シュピーリにも素材選択についての教訓となった。Siehe Schindler, Regine: Der Mythos Heidi. Ein archetypisches Buch. In: Dollfus, Andreas/ Rothenhäusler, Paul (5), S.18.

(10) Härle, Gerhard: Die Alm als pädagogische Provinz—oder: Versuch über Johanna Spyris "Heidi". In: Rank, Bernhard (Hrsg.): *Erfolgreiche Kinder- und Jugendbücher.* Hohengehren 1999, S.61 Anm.5. 「ドイツの国々を見てきた私の目には、スイスはブラジルかシナのように不思議な国に映じた。人々がのんびりと平和に暮らし、歩きまわり、家畜小屋には家畜があふれ、百姓の屋敷には鶏や鵞鳥や家鴨が群れをなし、通りには旅人が不安もなく旅をつづけ、宿屋では人々が

集まって笑い興じていた。敵の兵隊にびくびくすることもなく、略奪をされる恐怖も財産や生命を失う不安もなく、誰も葡萄と無花果の木の下に平和に暮らし、ドイツの国々の民の生活から見ると極楽島に住むような日々を送っていた。風土はずいぶんきびしそうだったが、私の眼にはスイスはこの世の天国に見えた。」(望月市恵訳『阿呆物語』下第5巻、第1章、岩波文庫 1974年、16/17頁)

(11) Siehe Schindler, Regine: Neues zur Entstehung von Heidi—Das Werk als Spiegel einer Frauenbiographie. In: *Johanna Spyri und ihr Werk* (3), S.53.

(12) Rutschmann, Verena: Energische Mädchen—sensible Buben. Zu den Kindergeschichten von Johanna Spyri. In: *Johanna Spyri und ihr Werk* (3), S.92.

(13) Zit. nach Rutschmann (12), S.92.

(14) ダグマル・グレンツ(中村元保・渡邊洋子訳)『少女文学 18世紀の道徳的・教訓的読物から19世紀における「小娘文学」の成立まで』同学社 2004年、318頁。

(15) Spyri, Johanna: *Heidi. Zwei Geschichten fur Kinder und solche, die Kinder liebhaben. 1. Heidis Lehr- und Wanderjahre, 2. Heidi kann brauchen, was es gelernt hat.* Basel und Gießen: Brunnen Verlag 2000, S.36.

(16) Kiepe, Hansjürgen: Landschaft Gottes. Zur Rolle der Verbzusätze in Johanna Spyris "Heidi". In: *Wirkendes Wort.* 17 (1967), S.410-429.

(17) Spyri (15), S.231.

(18) a.a.o., S.237.

(19) a.a.O., S.174.

(20) 使用されている讃美歌については、Härle (10), S.74参照。

(21) 例えばsiehe Uthmann, Jörg von: Heidegger verstehen? Heidi lesen! Johanna Spyris Naturkind von der Alm spricht verständlich aus, was der Denker undeutlich raunt. In: Die Welt, vom 31. Dezember 2002.

(22) Spyri (15), S.190.

(23) Spyri (15), S.74.